北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

『かざし抄』『あゆひ抄』私注(1)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 行雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004736

北海道教育大学紀要（第一部A）第四十八巻　第一号　　平成九年八月

『かざし抄』『あゆひ抄』私注（Ⅰ）

石井行雄

1

富士谷成章『かざし抄』『あゆひ抄』についての研究は、諸先学による探究が既に多く積み重ねられており、もはや贅言を挟む余地は無いかの如くである。諸先学の研究に導かれつつ、『かざし抄』『あゆひ抄』を国語学演習の素材として取上げ、解読を進めること数年を閲した。

その過程で、偶、『かざし抄』『あゆひ抄』の形態（書籍としての形態）に興味を引かれ、過日一文を公にした。（注1）この中で、『かざし抄』『あゆひ抄』の形態に漢語文典、とりわけ荻生徂徠のもののなぞりが見られることを指摘した。そこで、書籍としての形態のみではなく、内容にも漢語文典のうつしの残存する可能性が考えられるのではないかとの関心を抱くに到った。

漢語文典のうつしとしてまず考えるのは、訳語・釈語の利用ということである。漢語文典は漢字に訓を付し、その釈を加える形で論述が進められるのを通例とする。つまり

漢字――訓――釈

といった、漢字を中心とした関連性が提示されている。この内、「訓――釈」部分の関連は、「訓に利用された語」と「その釈」との関連ととらえ直すことが可能であろう。さらに、「訓に利用された語」が「古語」「歌語」に重なるときは、

漢字――訓――――釈
　　（古語・歌語）　（現代語訳）

といった関連となろう。こうした関連の中から、漢字を除き、「訓――釈」の関連のみを利用すれば、『かざし抄』『あゆひ抄』の

標出語――――里言
（古語・歌語）　（現代語訳）

といった関係が導き出されるのではなかろうか。

こうした関連を探る目的で、漢語文典と『かざし抄』との比較が痛感されていた。偶、学士論文の対象にこうした方面を取り上げようとした学生がいたため、漢語文典の訓・釈の用語と『かざし抄』の標出語・里言との比較を試みてもらった。（注2）この際、比較対象として取り上げてもらった漢語文典は、形態の類似との係りで荻生徂徠のものに、さらに内容上から『訓訳示蒙』に絞り込んでもらった。その結果のみ引かせてもらうと、『かざし抄』の「標出語――里言解釈」と、『訓訳示蒙』の「訓――釈」との一致するものは、『かざし抄』の全標出語二二〇例中六十二例あり、約二十八パーセントになる。（『かざし抄』の標出語のみを見れば一三九例、則ち約六十三パー

セントに上る。）

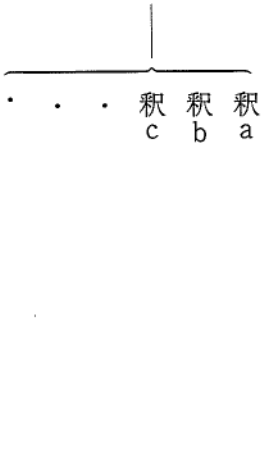
「訓――釈」の関係を固定的にとらえても、『かざし抄』里言解釈の三割近い部分は『訓訳示蒙』に重なることになるのである。歌語の解釈書中で、その中心部分である里言解釈の三割近くが漢語文典によってなぞれると言うのは注目すべきことではないだろうか。

ところで、ここに顧慮すべき問題がある。一つは、『訓訳示蒙』のみに絞り込んでよいのかということである。成章の兄・皆川淇園の『太史公助字法』題言の

一世間助字ノ解　不レ下二数十書一而シテ其ノ最モ膾炙スル者ハ文家必要訓訳示蒙之類　大半妄鑿ニシテ絶テ亡シレ可キレ取矣

という叙述を待つまでもなく、当時通行していた漢語文典は多量に上っていたはずである。中でも『文家必用』『訓訳示蒙』の盛行は目を見張るものがあったようである。すると、『文家必用』との比較は最低限試みる必要があろう。

次に問題になるのは、「訓――釈」のみを固定的に考えてよいのかと言うことである。漢語文典の中には同訓の漢字が多く見られるのであり、釈が複数に上るものも多いのである。すると実際には



といった形で、「漢字――訓――釈」の相関関係が示されているのである。こうした「漢字――訓――釈」の相関関係を、私に「相関系列」と呼んでみる。この相関系列は一つの漢語文典の中でも幅を持ったものであり、複数の漢語文典を利用した場合にはより幅の広いものになる可能性がある。つまり、あまり相関系列を固定的に考えない方が実態に近いのではないかと考えるのである。

そこで、過日、『文家必用』の中から一つの相関系列を摘出し、『かざし抄』の里言解釈がこうした相関系列と無縁でないと思われることを示した。（注3）

こうした経緯の後、平成八年度後期の国語学演習では『あゆひ抄』を取り上げ、その里言解釈と漢語文典から摘出した相関系列との比較を試みた。（注4）今回は、この操作の中で出会った『あゆひ抄』里言解釈部分と相関系列との近さの中から、二つの部分を取上げた。

尚、成章の記述の背後にあるのは、特定の漢語文典であると言うよりも、漢学習得の過程で獲得された一般的知識を無意識に利用しただけだと言う考えもあろう。しかし、これはより重大なことなのであろうと思う。もし、「無意識に」こうしたものが引用・利用されているとすれば、成章の学問自体がこうしたものに規制された性格（質）を持つということを意味するのであろう。つまり、成章の著述を理解するためには、漢学の一般的知識（それを知るよすがとしての漢語文典）を絶えず参観しなければならないと言うことになるのではあるまいか。（注5）

2

『あゆひ抄』巻五［十二］「如身（ごとみ）」について検討してみる。まず「如身」の全文を示す。

［十二］《如身（ごとみ）》

〔何ごと〕何は、事の靡、〔何がごと〕何上に同じ。また脚結なり。〔何のごと〕何は、名なり。a里、〔何ごと〕〔何がごと〕の二つは「ヤウニ」、〔何のごと〕は「ノヤウニ」と言ふ。ただし、いづれもよみづめにある時は、心得て「ヤウニアル」「ノヤウニアル」など里すべし。

秋萩も色づきぬれば、きりぎりすわが寝ぬごとや夜は悲しき。

うつろはぬ心の深くありければ、ここら散る花春にあへるごと。

逢ふ事は玉の緒ばかり、名の立つは吉野の川の滝つ瀬のごと。

下ひものしるしとするも解けなくに。語るがごとはあらずもあるかな。

これまた芝状（しざま）の言葉にて脚結にあらねど、言葉の上に置ぬ物なれば、ここに付けて出だせり。〔ごと〕は状の本にて、末・引・往（きしかた）にかかりては「射るがごとしとうべもいひけり」「射るがごとくも思ほゆるかな」「桂のごとき君にぞあひける」などよむ。みな同じ心得に釈すべきこと言ふに及ばず。○b「似たり」といふ言葉は全く装にて、言葉の上にも置けば、この抄にいはず。また、〔なす〕〔もろこ〕など上つ代に詠めるは『古歌あゆひ』に詳し。○「ヤウニ」の言葉、里に二つの心あり。一つはこの釈のごとく、物にたとへて、その通り、これに似たりなど言ふ心なり。これはふるく文にも書けることなり。いま一つは《可倫》の〔べく〕に当てたる、雨の漏らぬやうに屋をふき、風の通らぬやうに戸をあくるなど言ふ心なり。（注6）

ここで〰部aの里言と相関系列は重なるか否かを考えたい。又、〰部bの「似たり」という言葉の説明が「ごと」の解釈中に突然出現する理由も、相関系列の上から説明できないだろうか。

そこで、漢語文典の中から皆川淇園が具体的に書名を掲げた荻生徂徠『訓訳示蒙』（元文元年（一七三八））人見直養友竹『文家必用』（正徳六年（一七一六））、さらに、『あゆひ抄』（安永七年（一七七八））とほぼ同じ頃の漢語文典として岡白駒『助辞訳通』（宝暦十二年（一七六二））の三書を掲げ、この中から「ごとし」の相関系列を探ってみる。

『訓訳示蒙』巻五

〔如若似肖〕

○大抵。同ジヤウナ文字ナリ。但シ。如ノ字ハ如同ト連用ス。似ノ字ハ。疑似ト連用ス。故ニ。如ハ似ヨリ親シ。又。如若ハモシトヨム。ヤハリ。下ヨリゴトクンバト。反ヘル意ナリ、但シ若ノ字ハ又。モシクバトヨミテ。或ノ字ニ代用フルナリ。不レ如 不レ若 不レ似トモニ。シカズトヨム。コレニ二義アリ。コトクナラズト云フ意ト。ヲヨバズト云フ義トナリ。肖ノ字ハヨク似タルコトナリ。（注7）

『文家必用』上

如 和辨 ソノヤウナ。ト云詞ニアタル也○君子ノ之交淡シテ如シレ水ノト云時ハ。君子ノ交ハ。ナントナフテ。水ノ様ナト云コト也○其広キコト如シレ此ノト云モ。コノヤウニ広イト云コトナリ餘傲ヘレ此ニ○不レ如ト ヨム時ハ 和辨 シクハナシト云コト也。似ザルト云意ニナル也。字書ニ如ハ似ナリ也ト註スルユヘ也 ○不レ如ニ丘ガ之妹一学也ト云ハ。丘ガ学ヲ好ムニハ似ズ。ヲトツタト云コト也。何処ニ出テモ。我カ方ハマサリテモ先様ノヲトル意ニナル也 ○無レ友スルコト不ルレ如シカレ己ニ者ヲト云モ。我ヨリヲトリタル者ヲ。友ナフナト云コト也 ○勃如翼如ト云時ハ。勃ノ字ノ如ク。翼ノ字ノ如ク。ト云コト也 ○如相ヒ問ハ ト云時ハ。モシ問ヤウナ時ニハ。ト云コトナリ ○若ノ字モ如ノ字ト通用スレトモ。所ニヨリテ書別ルコト肝要也。如レ此ヲ若レ是トモ書リ ○有レトモ若キレ孔子ノ之聖一 ○若カクノコトキ人ノ類。コノヤウナト云辨也（注8）

『助辞訳通』巻下

如若猶似

如 如ノ字。ゴトシト読ム同也ト訓ズ如レ某ソレノ トハ某ト同ト云フコト也 又似也トモ訓ズレドモ十分ニ無キ辞ナリ同如似三等ニシテ与レ某同ト云ヘバ少シモ差チガヒ無ク全ク同キナリ如レ某ソレノ ト云ヘバ同ノ字ヨリハ一等疎ナリ似タリレ某ニト云ヘバ如ノ字ヨリハ文一等疎ナリ又然也ト注ス周易ノ

班如漣如ハ班然漣然ト同シ又而ノ字ト通ス春秋ニ星隕テ如雨ル。注ニ如ハ而也。星隕而且ツ雨タル也ト云ヘリ

若ノ字モ如也ト訓シテ。ゴトシト読ム如ノ字ト大氐一同ケレドモ若ノ字ハ彷彿ノ意アリ封禪書ニ其ノ夜若レ有レ光ノ　武帝紀ニ聞キレ若ヲレ有二万歳一云。見二神人ヲ東莱山一。若レ云カ見ヘント　天子モノ類是ナリ故ニ若ノ字ハ多クハ事ノ喩ニ云フ若網ノ在二網ミノ傍　若レ無レ人。累累トシテ若喪家之狗一ノ類。是也如ノ字ハ徂事物形状ヲ如二某ノ形一　云フ如キ義広シ

猶ノ字。若也ト注シテ。コトシト読メドモ如ノ字若ノ字ト殊ナリ猶ノ字ハ譬ヘル辞也字ヲ注スルニ某ハ猶レ某ノ也ト云ハ其義本正訓ニ非レドモ彼ヲ仮テ此レヲ明スノ辞ナリ蔽ハ猶レ益也。致ハ猶レ委ノ也ト云ハ。蔽ハ譬ヘバ蓋ノ字ノ意ナリ致ハ譬ヘバ委ノ字ノ意ナリト云フコト也孔叢子ノ白馬之辯ニ春秋記二六鷁退飛ヲ一　覩ハレ之ヲ　則六。察レハレ之ヲ則鷁ハ猶レ馬ノ也。六ハ猶レ白ノ也ニ。是猶ノ字ハ譬ヘル辞ナルコト知ルベシ

似ノ字。ゴトクト読ムコト俗語ニ限ル詩詞ハ皆俗語ヲ用ユ李白ガ詩ニ縁テ愁ニ　似レ箇ノ　長是ナリ凡ソ　俗語ニハ皆似ノ字ヲ如ノ字ノ義ニ用ユ（注9）

以上の記述から「ゴトシ」の相関系列を纏めると

漢字	訓	釈
如	ゴトシ	ソノヤウナ
若		コノヤウニ
似		
肖		
猶		

となろう。

『あゆひ抄』「如身」の〰〰部aの里言は、基本的にこの相関系列の訓・釈の部分に重なることが見てとれよう。

さらに相関系列の漢字部分に「如・若・似・肖・猶」といったものが並んでいることが注目される。『あゆひ抄』の〰〰部bは、こうした漢字の相関系列を念頭に置かない限り、「ごと」の解釈中に突然「似たり」という言葉の説明の出現する由縁は見出しにくいように思う。

3

『あゆひ抄』巻五［九］《被身》について検討してみる。

まず《被身》の全文を示す。

［九］《被身》

〔何る〕〔何らる〕何は、事〔何る〕の来なり。〔何らる〕は靡なき言葉を受く。ただし、これは大むねを靡ある装となして見るべきといふなり《被身》《令身》は脚結を取り具して靡ある装となして見二詞、心全く同じ。a〰〰いづれも里同じ。〰〰また、〔何らる〕を里に「ラレル」とも言ひ、〔何る〕を立て・伏せなどして、たとへば〔言はる〕とよむ言葉を「言ハレル」とも言ひ、また「言ヘル」とも言ふたぐひ、ただ同じ心なり。b二例あり。〰〰〰

○d第二、表をいささかかしづきて言ふ言葉なり。〔かしづくたたる〕といふ。

ならの葉の葉守の神のましましけるを知らでひ折りし。たたりなさるな。

〔らるな〕〔るるかな〕〔るれば〕など本抄を見よ。靡き、靡かぬさま、ただ靡ある装の心得なり。

〔たちる〕

春は霞にたなびかれ、

ともかくも言ひ放たれよ。池水の深さ浅さをたれか知るべき。

〔れむ〕〔れし〕〔れぬ〕〔れぬ〕〔れぬる〕〔られぬる〕〔れけり〕〔れにけり〕〔れて〕〔れぬらむ〕〔れつつ〕〔れで〕〔れず〕〔れざるらむ〕〔れざりける〕〔れなくに〕〔れじ〕〔れよかし〕など引歌、本抄を見よ。

○上つ代には多く〔何ゆ〕と言ひて、「泣かゆ」「しのはゆ」などよみ、これを伏せて「きらはえ」「いとはえ」などよめり。中昔以後は絶えてなし。ただし、すべて「見ゆ」「きこゆ」など言ふはこの心にて、なほ「思ほゆ」など言ふことは残れり。（注10）

この項目は〜〜部aにあるように独自の里言解釈を施さない。意味は〜〜部bにあるように二区分を示す。一つは〜〜部cにあるような、自発可能の意味、一つは〜〜部dにあるような尊敬の意味である。

次に、『訓訳示蒙』『文家必用』『助辞訳通』から、「る・らる」の相関系列を探ってみる。

『訓訳示蒙』巻五

〔見　被　所　遣〕

○四字トモニ。カハリナシ。訓ノ通リナリ。但シ所ノ字ハ。少コシカハリアリ。所ノ字ノ条下ニ見ヘタリ。e但シ。訓ノ通リナリトテ。世俗ノ云フ辞ノ。カヤウセラレマシテ。ドウセサラレマシテト云フ。ラレノ意ニテハナシ。人ニカウセラレタト云フ時ノ。ラレノ意ナリ。（注11・12）

『文家必用』下

見サシアタリタル。当坐ノ意ニ可シレ用　○盆成括見ラレタリレ殺サト云トキハ現在ノ意也　○後漢書ニ亦以テレ是ヲ見ラルレ軽セト云ノ類。見合セテ用ユベシ

所ソフセラレテ。シマフタト云意ニ可シレ用　○晋書ニ不下為ニ郷曲一所上レ齒ヨハイセ　○為ニ石勒カ一所ルレ殺サ　○前漢書ニ為ニ大臣一所ルレ非ソシ　○後漢書ニ上ミ為ニメニ国家ノ所レ二疑ハ。下モ為ニメニ権威一所レ望ミト云類。アイテ取タ上ニテ用来レリ。ソフタイ。所ノ字ハ物ヲ指テ三字ナルユヘナリ

被詩作ノドニハ。此字バカリヲ用ユ。過去現在ニ通ズル故也　○枉被三人ニ書シル莽カ太夫ト一　○応レ被ニ百花ノ繚乱タルニ笑ハ一ノ類（注13）

『助辞訳通』巻中

被　見　所

被被ノ字。ラルヽト読ム時。人ニ。カブセラルヽコトナリ。被ハ本フトンノ類ニテ覆フレ人ヲ　也ト注ス被レ用ヒハ彼ガ用ルヲ我ニ被ルナリ。不レ被レ用ニハ。彼ガ用ルヲ我ニ被ラヌナリ

見見ノ字モ。ラルヽト読メドモ。被ノ字トハ義殊ナリ被ハ彼ヨリ我ニ及ブ上ニテ云フ。是レ我ニカヽルナリ。見ハ彼ガ一分ノ上ニテ云フ彼ニカヽルナリ春秋成公十六年。公会ス著候斉候衛候宋ノ華元邾婁人ニ干沙隨ニ。不見レ公ヲ。公至レ自レ会。公羊伝日。不レ見レ公ヲ者トハ何ソ。公不レ見レ見也。是見ルヽノ字ハ彼ニカヽルナリ。不レ見レ聴カモ彼ガ聴イレヌナリ彼ガ一分ノ上ヲ以テ云フナリ。

所所ノ字モ。ルヽト読メドモ。語勢ニ因テ。ルヽノ意ニナル。所ノ字ニ被ノ訓ナシ故ニ被ノ字ノ如ク重キ義ニ非ズ為ニレ君所レ任セノ類。本君ノ所ロレ任スルト云コトナレドモ、上ニ為ノ字アルニ因テ語勢ニ因テ。ラルト読ム也凡為ニレ君所レ信セ。為ニ尚書所レ知。為ニレ賊所レ殺サノ語。

皆為ノ字如レ字ノ読ム。此句ニ去声ノ訓無シ。タメニト読ムハ非也為レ君為二尚書一為ニレ賊ノ意ナリ（注14）

以上の記述から「ル・ラル」の相関系列を纏めてみると

漢字	訓	釈
見	ラル	人ニカウセラレタト云ッ時ノ$\boxed{\text{ラル}}$
被		ソウセラレテシマフタ
所		人ニカフセラルゝ
遣		彼ヨリ我ニ及ブ

となろう。

『あゆひ抄』「被身」の〰〰部aでは里言解釈が施されていない以上、ここに相関系列との重なりは考えにくい。しかし、注目すべきは〰〰部b・c・dの部分、つまり意味区分の方法である。『あゆひ抄』ではcで自発可能の解説を、dで尊敬の解説を行っており、受身の解説は行われていない。対して、相関系列の方は受身の意味の説明のみでつくされている。受身漢字を中心としたこの相関系列の説明を、『あゆひ抄』は意識的に回避しているかの如くである。あるいは、これは『あゆひ抄』の編纂法を理解するのに示唆を与えるものではなかろうか。

一方、『訓訳示蒙』の〰〰部eの説明も注意すべきであろう。受身の説明のそれに「世俗ノ云ッ辞」の尊敬用法を対比的に用いているのである。受身以外の「ル・ラル」の意味の解説にこの手法を用いれば、「自発可能」「尊敬」の二区分となってくるのである。これは単なる偶然なのであろうか。

注1、「『かざし抄』『あゆひ抄』の形態」『伝承文学研究』44号

注2、葉内美雪・平成七年度学士論文『富士谷成章『かざし抄』研究――荻生徂徠『訓訳示蒙』との関連をめぐって――』

この調査の詳細は別途公にする予定である。

注3、「国語史資料としての『文家必用』」『史料と研究』25号

注4、参加者は、池田福重・下村朋夫・千崎奈緒子・館岡香央里・田中正道・大道諭実・長谷咲子・羽賀慈恵・保坂国馨・松岡裕美・藤木睦・渡辺大樹

注5、この点に関して、宮川悠果・平成八年度札幌校集中講義単位レポートに教えられるところがあった。

注6、中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』風間書房・昭和35、三四七頁〜

注7、『漢語文典叢書』一、一二三頁〜

以下、漢語文典の引用は通行字体に改め、合符は省いた。

注8、無刊記〔序刊正徳六年（一七一六）、岡田群鳳堂〕（筆者架蔵）上巻十四丁ウ〜

注9、『漢語文典叢書』五、三七頁〜

注10、注6文献三三九頁〜

注11、注7文献一三〇頁〜

注12、この引用部分の「カウセラレマシテ、ドウセラレマシテ」の用法は、徂徠のそれそのままとすれば、尚、近刊（平成9年7月15日発行）の村上雅孝「近代語史における『訳文筌蹄』の意義」『国語論究第6集近代語の研究』（明治書院）は「この『訳筌』」をふくむ徂徠関係資料は、広く近代語の資料として、これからより一層利用されるべきであろう。」として近藤尚子「概念の連鎖―「訳筌初編」の文字排列方法『国文学研究』86と湯浅茂雄「国語史資料としての「訓訳示蒙」「訳」言」（第104回近代語研究会発表資料平5・5・21）との両研究に注意しておられる。〈校補〉前期江戸語の用例とみなせる。

注13、注8文献巻下二十三丁ウ〜

注14、注9文献二十頁〜